

6、乗り物あそび(二月)この一連のものは、幼稚園における社会観察の主流をなすものとして考えた上に、集団意識や行動の点からみますと、知識的には内容自体の持つ社会的なものの認識が高まり、子ども同志の社会性という点からは、集団の結びつき、すなわち、個々の個人が友人と結びつくことによって、その個々の個人の生活が高まっていくこと、また集団による結びつきによってこそより高い程度の学習のできることなど集団の意識の向上を作業を通して、わからせようとしているのです。このあたりで、幼稚園段階におけるの社会性のしあげをしていこうとしているわけです。

このように、私たちは、年間の教育計画の中でこの問題を考えてまいりましたのでこれも提案の裏づけとして発表しました。なお、具体的な研究として、その集団意識に高めるための具体的場であるグループのことにもふれました。

そして、それは、グループ内での子どもの意識の動きを、こまかく透徹した目で見通していくことが大切であることを申し上げたのでした。

四、話しあわされたこと

(分科会司会者 小山田幾子
パネル討議出席者 山村きよ)

最近まれにみる、といった熱心な討議が行われました。社会集団の意識や行動というような打ち出し方は、むずかしいではないかということからはじまって、グループの見方の問題に中心がおかれ、お互いの体験談を中心に具体的に論議されました。

そして結論としては、この問題は、どうしてもねづよく、具体的な場で実践していかなければならないということが確認されました。

また単元の設定については、異論もありましたが、幼稚園段階でも、どうしてもこ

△南山幼稚園▽

放送教育

(三三・二・二二)

小山田幾子

子どもたちが、幼稚園という集団生活の場で、みんなで、静かに、たのしい音楽や、お話や劇などを見たり、聞いたりする態度をやしなひ、人間としての基礎が培わ

うしたカリキュラムをおいて考えないと、しっかりした教育になっていけないだろう、その日、その日を無事におえればよいといったことでは、いけないのではないかという話になりました。

五、あとで考えたこと

少し理くつっぽい研究会にはなりませんが、私たちが、幼稚園教育で考えなければならぬことは、もつと背骨になることに関心を持ち、筋の通った研究を重ねていきたいということでした。理論のある実践活動こそ本ものの教育を築いていくからだと思います。(筆者は現済美幼稚園長)

れるといわれるこの時代に、いろいろの角度から種々の生活経験をさせ、情緒を豊かにすることは、非常に大切なことであり、その必要は、いまさらいうまでもないこと

だと思ひます。

放送教育は、その一つといえましよう。

聴覚を働かせて、耳から注入するだけのラジオから、聴覚に訴えて新しくテレビが登場してまいりました。テレビは、直接具体的でありますので、内容が教育的であつて幼児向のものについては、幼児に適した教材といえます。

当園の放送施設について

保育家は三室ですが、小学校併設のために全校式校内放送の施設が各室にあります。ずっと以前この施設を使って、聴取していましたが、とにかく位置が高く、音響が悪く、声が散つて聞きとりにくく、何としても、幼児を集中させて聞かせることは、不可能なことでした。その結果、その装置を取りはずしてコードを長くし、自由に動かすことができるようにしたのですがやはり器械がよくなかったためか、声が割れてしまつて、よく聞くことができないのです。その中、小学校低学年の時間と、幼児の時間とが、ぶつかつてしまい、小学校が重点のため、自然に幼児の時間が聞かれない状態になつてしまつたわけです。そのため、当園では、区の備品費、あるいは

修了の記念品で、各室に家庭用受信機を設備しました。

二つの室の受信機には、プレーヤーをつけてレコードもかけられるようにし、一室は電蓄にしました。

そして高さも、子どもが腰かけて、大体の少し上にくる程度にし、プレーヤーのついた受信機の台には車をつけて、自由に移動できるようにして聞かせています。

放送時刻について

朝の八時四十五分から九時までの歌のおばさんは、ちょうど登園する子どもたちを迎えるように各室から流れ、みんなの知っている歌や、たのしい音楽が、子どもたちをたのしませてくれています。

この時間に、こうしたたのしいリズムが流されていることは、本当にうれしいことと思ひます。

幼児の時間が以前十一時五分から十五分まで、十分間流されていたときは、当園では非常に利用しやすく、好都合であつたのです。

それは十一時頃まで、主題による保育をしていたり、あるいは自由に遊んでいたりにして、室にはいって、静かにしていると、

幼児の時間になり、それを聞いてから、靜かに食事の支度がはじまり、落ちついて食事をするという事で、本当によかつたのです。

それが十時五分からになつてからは、冬期の場合は、仕事の途中の場合があつたりしてみんなで靜かに聞くというときが割合に少なく、集団で聞かない場合は、大體自由に聞くようになりがちなのです。自由にとつても、教師が全然ふれずに子どもにまかせておけば、次第に聞かなくなつてしまふのです。

教師は適當に関心をもちながら、強制的でなく自由に聞ける態勢がとれるようになっています。

テレビの場合は月、火とも十一時三十分から二十分間ですので、終つてから食事の支度、そして食事をするようにしています。少し時間はおくれますが、食事前靜かにできて、よい時間と思ひます。

指導について

当園では、幼児向のラジオ・テレビの内容をあらかじめ、テストによつて知り、それと同時にカリキュラムの主題に合致したもののある場合は、週案立案のときに、

積極的にそれを取り入れるようにしていません。

「お話出てこい」のようなものについては、その時期のカリキュラムに合うものが少ないのですが、幼児の時代にぜひ聞かせたい、昔話や、名作物を幼稚園ではなかなかできない音楽や擬音をいれ、その上語り手もお話の専門家であり、子どもも非常によく喜んで聞きますので大いにこれを取りいれています。

事前指導、聴取中の指導、聴取後の指導など考えられますが、これらは適当にしております。それは決してゆきあたりばかりではなく、テキストによって内容が検討されていますので、そのねらいによって、そのときの子どもを考えて指導するようにしています。

聴取前指導については、題名をいうくらいで「今日はどんなでしようね」くらいの程度で、たのしさを持たせるようにし、聴取中の指導については、聴取している子どもが理解できなかったであろうと思われるるときに、説明する程度にしています。

聴取後についても、くり返させたり、どこがおもしろかったかなど聞いたり、お説教的なダメ押しは、なるべく避けて、聴取

したままで、終る場合が多くあります。

よくいわれることですが、たのしく、いい気分が終ったところを、こわすような結果は、かえって悪いのではないかと思うのです。

テレビに対する子どもたちの興味と関心は大変なものです。

その原因は何か？ おとなたちのたのしんでいるテレビをみて子どももテレビはたのしいものと思っているのか、映画のように感じているのか、テレビの器械そのものに関心があるか、あの小さなスクリーンに映されることに興味があるのかどうか、とにかく「テレビの時間よ」というと、テレビの室にいくために、上手に一列にならんで待ちます。そして口々に、テレビのおぼさんのテーマ・ソングをうたって、うきうきしています。

“先生今日はなあに”

“月曜日だからみんないっしょによね”

“テレビのおぼさんだね”

“あしたは人形劇だね”

テレビの室にはいって、静かにしながら待つ間に題名だけはいったりします。タイトルがでてくると「あっはじまり、はじまり」と、たいへんな、声、声、声です。

たくさんバラが、出て来て、大小チュールリップがゆれ、チュールリップの中からテレビのおぼさんの顔が現われ、テーマ・ソングがうたわれると、もうすっかりその中に、とけ込んでしまう子どもたちです。そしておぼさんと直結して話し合いをします。

テレビの内容については、いろいろありますが、とにかく、その効果は家庭調査の結果からも、子どもたちの遊びの中にも、いろいろの表現の中にも、現われて来ていることは見逃すことはできません。

テレビを保育に取り入れることは、新しがりやだからではありません。前にも申しましたように、幼児にはその時代に、幼児に適したいろいろの豊富な経験を得させることが好ましいと思うのです。

おとなはテレビに夢中になっている、子どもは？ 子どもはみない、ということとはできるでしょうか。子どもには子どもに適した、たのしいテレビをみせてたのませ、保育の中に大いに文明の利器を利用して、明るいたのしい生活をさせたいと思います。

家庭へ帰ってから、家庭であるいは店先で見るテレビの影響、そして夜おそくまで

見ていることによつて、疲れる子どもたちについては、これはおとながみるものだから、子どもは寝ましよう、目を塞ぎ、耳を塞ぐことはできないと思ふのです。

この点については、両親教育の指導が必要になつてきます。

放送を利用して保育の効果をあげるのに、放送に対する教師の意識が問題となると思ふのです。

何事もそうであるように、教師の意識のあるなしによつて、子どもは、どんなにも左右されます。放送に興味をもつようになるのもしかりです。

その教師が、意識をもつ、もたないについては、もちろんその教師自身の考え方、あるいは熱意、意欲、研究心その他に、よることですが、いくら熱意、意欲があり、研究心があつてもその裏づけとなる費用がなければ、施設をすることもできず、結局したくてもできないという結果になつてしまふと思ふます。が教師に熱意と意欲があれば、その施設は必ずやできるのではないでしょうか。

なぜなら、その熱意、意欲が周囲の人たちを動かすことができると思ふのです。ですが、その周囲の人たちが教育に関心

をもち、教育に対して積極的に、いろいろの面で協力を惜しまない人たちならば、問題は無いのですが、無関心な人でも、その教師の眞の熱意や意欲を感じとつて動くようになるものです。

逆に、そういう人たちを動かすような熱

△南千住第二幼稚園▽

自然の環境設定 (三三・三七)

上野初枝

1. 地域の実状を知る

幼児は身近かの事物を直接見たり、聞いたり、さわったり、たたいたり、匂いをかいたりして観察する。それでその環境により見るもの聞くものが変わつて来るわけである。子どものうちに、なるべく豊富に何でも経験させることは、大変望ましいことであるが、この地域では、なかなか充分な経験を与えることは困難である。それは当園の通園地域が、一方は隅田川に、一方は隅田川駅という大きな荷物駅に、またもう一

意がほしいと思ひます。

われわれ教師は、伸びる子どもたちのために、何事にも打ちこんで、研究し、反省しながら一歩一歩をふみしめて、山の頂きを目指して進んでいきたいと思ひます。

方は乗り物のはげしい区境の大通りにと、こうした三辺にかこまれた特殊な地域であるからである。

そこで、このような地域にある当園としては、どのように環境を整え、どのようなことに関心や興味を持たせていくか、ということが、まず第一の課題である。

第一に自然に関し、当園の地域の実情をよく調べてみて、何があるか、何が不足か、ということを知りたいと考へたのである。そこで手始めに、自分たちの最も手近なところから、ありのままの姿を記録して